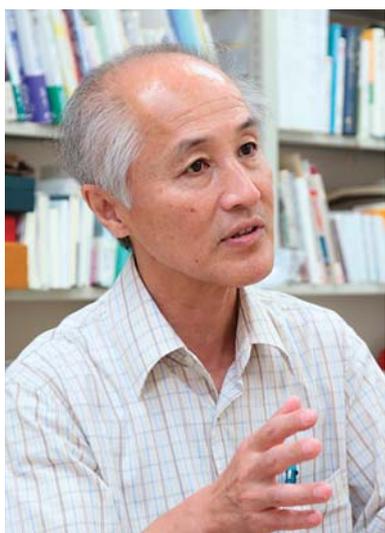


「共育」をめざして

理事（学生担当） 杉 万 俊 夫



新入生のみなさん、入学おめでとうございます。

人生には何度か、未知の世界に飛び込む旅立ちの瞬間があります。みなさんは、今、大学生活という新しい世界に旅立とうとしています。

共育——共に育む

大学生活の中心は、何と言っても教育です。大学での教育は、既存の知識を学ぶのみならず、新しい知識を探求する研究活動へと、皆さんをいざなっていきます。ここが、高校までの教育との大きな違いです。

教育の中核をなす授業は、全学共通科目と学部専門科目に大別されます。それぞれについて、授業内容やカリキュラムを説明した出版物が用意されていますし、ガイダンスも行われています。

しかし、「授業＝大学生活」ではありません。あくまでも授業は大学生活の一部です。では、大学生活とは何でしょうか。これは、大学とは何かという問題にもかかわる重要な問題です。

この問題に対する回答の一つとして、「大学は『共育』の場」という見方を提示してみたいと思います—共に育みあう場、それが大学ではないかという見方です。では、どのような人同士が、どのような共育関係を紡いでいくのでしょうか。

教員と学生

まず、教員と学生の共育関係。すでに述べたとおり、大学の教育は、新しい知識を探求する研究活動へと連なっていきます。研究活動の先輩である教員の導きが重要なのは言うまでもありません。しかし、同時に、若い学生の新しい発想が研究活動を変化・進歩させるトリガーになることも珍しくありません。その意味で、大学の教育は、教員と学生の共育なのです。教員から学生への一方的な知識伝達を超えて、教員と学生の相互作用を軸にした新しい授業の試みも盛んになりつつあります。

学生同士

次に、学生間の共育。課外活動は、その典型でしょう。京都大学には、多くの体育系・文化系サークルがあります。そこでは、先輩と後輩、同期生同士、OB・OGと現役生、さらには、

他大学のサークルとの共育が行われています。

学生間の共育で、ぜひ触れておきたいのは、留学生と日本人学生との共育です。京都大学に学ぶ留学生の数は、年々増加しています。また、留学生の出身国も多様になりつつあります。文化や言語の違いを超えての共育は、いわば日常生活での国際化です。

自ら海外に留学し、積極的に外国人との共育関係をつくっていくこと — これも重要です。それを経済的、制度的に支援する体制も充実しつつあります。常に、情報収集を心がけ、積極的に留学のチャンスを見つけてください。

共育を支援する共育

共育が、いつも順風満帆に進むとは限りません。軋轢、摩擦が生じるのも、また自然です。自信をなくして落ち込むこともあるでしょう。あるいは、心身の障害をかかえ、共育の関係づくりにサポートを必要とする人もいます。

共育関係をうまくつくれないとき、それをサポートするのも共育です。京都大学には、学生の共育をサポートする制度や施設があります。カウンセリングルームには、共育関係がうまくいかず、心の悩みを抱える学生を、カウンセリングという共育によってサポートするカウンセラーが待っています。また、心身の障害によって共育関係をうまくつくれないときには、遠慮せず障害学生支援ルームを訪れ、専門家と共育関係をつくってください。

共育のルール

京都大学には、約2,700人の教員のほかに、同じく約2,700人の職員が働いています。皆さんは、折に触れ、さまざまな職員の方々の支援を受けることでしょう。実は、それも、学生と職員の共育なのです。人生の先輩である職員の方々からも、皆さんはいろいろなことを摂取できるでしょうし、職員の方々も若い皆さんからエネルギーを摂取できるのです。

最後に、京都大学で皆さんがさまざまな共育関係をつくっていくには、最低限のルールも必要です。ぜひ、守るべきルールは守って、自分独自の共育関係を形成して行ってください。

この「学生便覧」は、授業関係は他の出版物に譲って、それ以外に、京都大学ではどのような共育関係が可能なのか、どのようなサポート体制があるのか、どのようなルールがあるのかをまとめたものです。ぜひ、早い機会に一読してください。